

新著紹介

人文地理學概論

ハンチンゲン著
伏見義夫 譯

大正十五年八月五日、積善館發行、定價四圓、挿圖四十七、
コロタイプ十四、四六版五四四頁

一九二一年エール大學のハンチンゲン氏がカシンゲン氏と共に著した Human Geography の翻譯である、伏見君は大正八年の京大出身の文學士で甲南高等學校で地理の教授をしてゐられ、傍ら神戸高等商業學校で地理の講師をしてゐられる篤學の士である、石橋教授が態々本書について綿密周到な校閲の勞をされたのであるから、譯文の原著を忠實に現はすことに於ては申分がない、世間普通の翻譯物に見るやうな隔靴搔痒の嘆あるものは雲泥萬里の差がある。其論ずる所は人類と自然的環境との關係、人類と地勢、水系と人類、土壤及礦物と人類、氣候と人類、動植物と人類、人類相互の大綱目に關して誠に平易明快な論斷を下し、就中ハンチンゲン・トン氏の高調する能力と氣候(特に氣温)との關係の如きは、尤も傾聴すべき論であるが、全篇を通じて之を見れば、經濟地理上の原則を學ぶに尤も適したる書籍である。何はともあれ、今日地理學界に人文地理の好參考の書に至つて少い時に當つて、この權威ある著書の翻譯の出たことは、我國學界の慶事であらばならぬ。裝幀も美ばしい、印刷も鮮明で誤植も少い、挿圖も要領を得て且つ美ばしい、譯文は流暢である。

十四頁からの索引もついてある、譯者及出版者の勞を多しめて敢て江湖の讀書子に推奨する、蓋し地理を學ぶもの、みの參考書でなくて、世界の大事を知らんとする一般人士必讀の書であるを信するからである。(藤田)

○東京地質調査

復興局建築部

大正十五年一月(七月頒布) 菊版二五頁 圖版三版

第一回報告(地球第三卷三號四〇八頁参照)は十三年十月に公にされたが爾後大正十四年九月迄に復興局建築部に於て試験した二百七十井、及他の約八十試錐井の結果に基きてこの第二回報告が編まれた、之に關與されたのは第一回と同じく井上禧之助、清野信雄の兩氏である。本報告の地質の條下には下町の地表から二十米乃至三十米以下に成層する第三組層に就いて略述し、次に地下にある洪積層の層序を記述す、洪積層は厚さ十米乃至二十米稀に三十米で其の層序を下位より擧げると(一)下部砂層(二)下部砂礫層(三)下部粘土層(四)上部砂層(五)上部砂礫層(六)上部粘土層である。此の内最も廣く賦存するのは(四)の上部砂層である。沖積層は厚さ二十米乃至五十米である。終りに附圖の説明がある。第一版は二萬分の一東京地表及地下地質圖であつて第一回の同縮尺の地質圖に比すると著しく詳細なものである、但し印刷はもこのものに比して甚しく劣つて居る洪積層下部の砂礫層と砂層の區別などは地圖上で著しく不明である。此の圖によれば地下に於ける洪積層が臺地をなして居ることが丁度現在の山の手の様である。この沈降臺地は溪谷によつて北中南の三部に分れ

て居北部は上野臺及本郷臺から連續して下谷坂本町より日本橋富澤町に亘る、中部臺地は駿河臺から延びて南方濱離宮月島に連る、南部臺地は芝愛宕山、三田臺より連續し南東芝浦方面に延びて居る。北部中部兩臺地間の彎入部には三つの小丘がある。この圖によつて東京が約三十米沈降した以前の地形を明瞭に窺ふことが出来る。而して現在の隅田川の下流地方即ち厩橋以南は此の舊臺地の東麓を南流した河流に一致する。隅田川はこゝでは先行谷をつくつてゐると云へるであらう。此の外この圖から種々の古代地理學上の材料が得られる。圖版第二は試錐井の柱狀圖であつて、之によれば洪積層中に含化石層の多くがあるのが著しい、學問的に其等の化石が研究されることが望ましい、第三版は地質断面圖で之も建築上の實用効能以外地史學上にも大に役立つものである。一言附加へたいのは地質圖によつて見ると鈴木敏氏以來洪積層だまされた隅田川に近い聖天山が沖積層となつて其の周圍では沖積層の深さは三十米以上あつて其の下は直に第三紀層に接することである。本調査がかくも詳細な地質圖を公刊するまでに施行されたのは文化都市としての東京に基礎を置いたものと云へる。然し猶調査すべき事項が残されてゐる様であるから此の調査が繼續されることを熱望する。(N)

○横濱地質調査第一回報告 復興局建築部 大正十五年一月(七月頒布) 翻版一二頁 圖版三版

本報告は井上壽之助、六角兵吉兩氏の參與したもので、東京地質調査と並ぶものである。横濱の地下の地質に就いては

從來横濱附近の一小局部の調査があつたのみで甚だ不備なものであつた。大正十四年度より復興局建築部は地下地質調査の爲め鑿井し九月迄に其の數六十九に達した。井の深さは約九米から約五十六米に及ぶ、横濱の地質を概説すると横濱の基盤は第三紀の青灰色凝灰砂質頁岩より成り屢薄い灰色砂及白色浮石砂を挟む、露出では第三紀層は洪積層に不整合に被覆される。洪積層の下部は臺地の斷崖に露はれ厚さ三十米を越えざる黃褐色砂礫で膠粘土層を挾有する、洪積層の上部は臺地の表面に露はれた褐色ロームで普通厚さ一・五米乃至六米ある。沖積層は粘土、砂、礫より成るが層序は甚だ不規則である、又平地の表部には普通三米極厚六米の盛土又は粘土がある。第三紀層及洪積層の下部はロームの下に廣く分布して居るが平地の試錐によると第三紀層は平地の下に沖積層に直接して伏在するが洪積層は沖積層下にはない。第三紀層は横濱に於ける最も強固な地層で東京附近の第三紀層よりも更に強固である。附圖第一版は一萬五千分の一横濱地表及地下地質圖で、臺地に於ける第三紀層及び洪積層の分布並に今回施行した六十九の試錐井の地質を基準とし此の外他の約五十の試錐井の地質を参照して下町の地下に於ける第三紀層の分布を示したものである。下町では海面下毎五米に一線を描きて第三紀層の地下の深度を示した、之を略説すると第三紀層は臺地の下部から、初め急に次で緩かに下町の下部に低下して居る。下町の下部は第三紀層の浸蝕された谷で、溪谷は三つあるが最も著しいのは大岡川の谷地即ち神奈川臺と横濱臺

との間である。この舊き谷は井土ヶ谷町に於て既に海面下二十米で本町南伸通一丁目に於て海面下四十八米以上に達してゐる。又新濱町棧橋及本牧臺の北下の山瀬町埋立地は深き溪谷を隔て、相對する海面下五米の臺地である。之等の第三紀層向深線の分布から見ると横濱は洪積世後の或時代に少くも二十米沈降したことを窺はれるのは東京に於ける約三十米の沈降と共に著しい過去の事變である。第二版には試錐井の地質柱狀圖と地質断面圖を掲げてある。(N)

雜報

○筑前遠賀郡洞山島の化石層

筑豊炭田の北部、

長尾理學士の蘆屋層群中には處々に化石の産地があつて、鈴木博士の福岡圖幅説明書にも淺川、三ツ頭の化石を記載され木戸理學士の筑豊四郡煤田地質圖にも本城高須山鹿の各西方岩國、坂木等を化石産地として擧げられてゐる。これ等の地層につきては長居學士によつて綿密に研究されつゝあるが、自分は今夏、北九州旅行の際、野田理學士から趣味ある談話を聴取し、踏査の念禁するによしなく、洞山島に數時間を費した。

洞山島は遠賀川の河口に近き周圍十餘町の小島で西北に向つて稍長く延び、對岸の柏原海岸との間には橋がある。島の西岸には海蝕崖が由廣くあらはれて、後方の波成斷崖との間

に臺地が出来てゐる。こゝに料亭軒を並べて避暑客を呼び、蘆屋からも通船の便がある。柏原の海岸から橋を渡つて洞山島に着くと粗粒砂岩があつてベクテン其他二枚介の化石が豊富に存在する。島を東に廻ると細粒の砂岩となり、化石は見えぬが、西北尖端附近に再び粗粒砂岩が露出して、ベクテン其他二枚介の化石が存在する。それから島を西に廻ると、料亭の裏の波成斷崖は稍細粒の褐色砂岩が厚く分布して主としてツリテラヤツニ類の化石が多い。砂岩中にノジュールとして灰白堅硬の砂岩塊があつて、特にツリテラの群落をなしてゐるツリテラには二寸にも及ぶ大形のものもある。走向は北四十度乃至五十度西、傾斜東北に二十度内外。柏原の西南海岸ナミカケ鼻の斷崖は青緑色の細粒又は粗粒砂岩で走向北五十度乃至六十度西、傾斜東北に二十度位でベクテン、ツリテラ其他二枚介巻介類が多い。即ち洞山附近の層序は最上部に細粒砂岩があつて化石なく、次に粗粒砂岩の滯層があつてベクテン其他二枚介化石に富み、この下が厚い褐色砂岩でツリテラを主とし、その下部は青緑細粒粗粒砂岩でベクテン、ツリテラ等が多い。(上治)

○筑豊國境金國山嶽とカルスト地形

筑豊炭田

の中央、東は豊前田川郡、西は筑前嘉穂郡の低き第三紀の丘陵地を歐下して、城嶽狀に聳える金國山嶽は金國山(四二二米)を最高として、船尾山(二三〇米)金丸羅山(二九六米)等三百米内外の高距を保ちつゝ、西徼北に連互する。本年の夏開通せる九州産業鐵道は長い隧道を穿ちて山嶽を切り抜き、西